

難週、復活祭週間など特別の場合以外には目立った歌の材料の含まれない課もある。しかし歌われようと歌われまいとこれらの課の詞はその日の晩課や早課と同じものを含み、同じ形式で執行される。

これらの2つの課の他に、教会の聖堂であるいは別の場所で行われる祈祷で、大半が歌のものがある。これらは私的な性格を持つ³⁵。(1)感謝祈祷など(願い、讃美、感謝の祈り)(2)パニヒダ(死者のための祈り)である。両方とも基本的には早課の省略形である。感謝祈祷にはトロパリ、省略されたカノン、ポロキメン、福音の読みがあり、大詠頌は含まない。パニヒダもほとんど同じ構造であるが、福音の読みがなく死者のためのスティヒラが加えられる。感謝祈祷は教会の周囲を回る間に行われることもある。

以下の祈祷は週、年、三歌経の周期などに属さず、感謝祈やパニヒダと同様に、必要に応じて行われる。この範疇には主教叙聖、司祭輔祭の叙聖、聖堂成聖、婚配式、埋葬式、聖水式などが含まれ、歌が大部分を占める。トロパリ、スティヒラなど他の祈祷に含まれたのと同じ聖歌が用いられており、ロシア正教会ではこれらの祈祷のために特別に新奇なシステムを作りださなかった。その理由からこれらの歌は聖歌者よりも奉神礼学者の興味の対象となっている。

ここに様々な祈祷の概観を述べてきたが、正教会の礼拝の音楽構造に重大な影響を与える他の重要な要素については十分に関連づけることができなかった。厳粛に聖職者が至聖所に進む「聖入」、司祭の祝福、炉儀、教会の明かりの点灯、消火、などティピコンに記された奉神礼的な動作の目に見える部分である。これらの動作の詳細については別の機会に譲る。ただ述べておきたいのは、聖職者の奉神礼的な動きとともに、参拝する信徒の動作、視覚的なアイコンやフレスコ画、それらすべてが奉神礼の中で音楽要素の使われ方に反映され、統合された全体が形作られ、奉神礼中ですべての要素はお互いに依存しあう。また、聖歌はこれらの要因を発展せしめた民族的な気質の影響も受ける。

³⁵ 訳註：著者は感謝祈祷、パニヒダなどを私祈祷の範疇に入れているが、正教会における祈祷はある意味ですべて公祈祷と解釈すると、この場合はむしろ個人の依頼による臨時公祈祷と呼ぶ方がふさわしい。

6. 重連祷、啓蒙者の連祷、信者の連祷2つ（金ロイオアンのものと異なる）
7. 「今天軍見えずして」を歌う。この時、先に聖にせられた祭品が奉献台から宝座に厳粛に運ばれる。この歌は金ロイオアン、聖大ワシリーの聖体礼儀のヘルビムの歌の代わり。エフレムの祝文。
8. 増連祷
9. 天主経を歌う。
10. 神品領聖の間に領聖詞を歌う。
11. 信者の領聖。以下は金ロイオアン、聖大ワシリーの聖体礼儀の形に従うが、詞とメロディが若干異なる。

このように先備聖体礼儀では一番厳粛な部分（「信経」から「常に福」）が省かれている。音楽的なハイポイントは会衆が膝を屈めて歌う「願くは我が祈りは」と「今天軍」にある。

王時課

降誕祭と神現祭の前晩、聖大金曜日には特別の順序の祈禱が行われる。これは王時課（царские часы）³³と呼ばれ、一時課、三時課、六時課、九時課が連続して結合して行われる。構成は通常の時課と同じであるが、※印をつけた部分が付加される。

王時課

1. 始まりの祈りの後、聖詠3つ誦読（祭によって変わる）
2. 祭のトロパリと特別の生神女讃詞、それから別のトロパリを両詠隊で交互に歌う。※
3. ポロキメン。アンティフォン応答形式で歌う。※
4. 旧約の読み、書札の読み、福音の読み。※
5. 聖三祝文、天主経
6. その日のコンダク
7. 各時課の終わりの祝文、
8. 大聖堂で主教が立つときは、全時課に続いて「萬寿詞」、国の統治者の全タイトルを長輔祭が唱え聖歌隊が応える³⁴。

他の祈禱について

今まで歌が大きな役割果たす課について述べてきた。この他にも晩堂課や夜半課のように大齋期、受

³³ 伝統的にツァーリまたは皇帝が出席して行ったことに由来する名称。

³⁴ 国の統治者に言及しない萬寿詞を適当な詞で、聖体礼儀などの終わりに歌うこともできる。

い」アナフォラは両詠隊が集まって歌うことが多い。

18. 生神女の歌。両詠隊が集まって歌うことが多い。祭の時は変わる。聖大ワ

19. 第2の増連禱

20. 天主経。会衆または詠隊が歌う、あるいは誦する。

21. 領聖詞（その日の）。教役者が至聖所で領聖する間歌われる。司祭が多いときは時間がかかるので、領聖詞に加えてその日にふさわしい他の歌を歌ってもよい。

22. 御聖体が現れ、信者が領聖する間、領聖の歌「ハリストスの聖体を受け」を歌う。

23. 感謝の祈りと歌、感謝の連禱、終わりの祈り、祝福、発放。

上記のアウトラインに見られるように、変化する歌はもっぱら啓蒙者の礼儀にある。変わらない歌には調やメロディの指定がないので、聖歌者にある程度音楽付けの自由が与えられている。聖体礼儀の音楽高揚曲線は波型で、小聖入に最初の上昇があり、重連禱で再び上昇する。そのあと一時下降し、ヘルビムの歌で再び上昇し、15. 16. で少し沈んだ後、アナフォラの感謝の歌まで上昇し続け、生神女の歌に続く。この高揚曲線の形や流れは祭日の場合など特別の場合には変化する。また主教祈禱の場合は特別の形をとりハイポイントも異なる。

上記の聖体礼儀の形式は、ごく稀に特別な形をとることがある。降誕祭と神現祭の前晩、生神女福音祭、聖大木曜日、聖大土曜日には祈禱の最初の部分が晩課に置き換えられる。つまり暦の次の日の行事に関連して晩課＋聖体礼儀のセットの形になる。晩課から聖体礼儀への移行は旧約の読み（パレミヤ：晩課の7）の最後の読みが続いて、小連禱、聖三の歌（聖体礼儀6）から聖体礼儀が行われる。（この場合は聖大ワシリーの聖体礼儀）

先備聖体礼儀には聖体機密の規程も聖変化も含まれないが、晩課の終わりに領聖が行われ、聖体はその直前の金ロイオアンまたは聖大ワシリーの聖体礼儀で用意される。先備聖体礼儀は大斎期間の6週間の水曜日と金曜日、受難週の月、火、水曜日に行われる。

先備聖体礼儀

1. 始まりは通常晩課の形、但し晩課の3.の聖詠経のカフィズマは常に第18カフィズマで、これを3段に分け、段ごとに小連禱がある。
2. 晩課の聖詠（晩課の5.）に10ステヒラをはさむ。
3. 晩課の歌「聖にして福」に続き教役者の小聖入、第1のポロキメン、第1パレミヤ、第2パレミヤに続いて聖体礼儀が始まる。
4. 140聖詠の4句からなる「願くは我が祈りは」の歌に附唱がついて歌われる。通常ソロ、またはトリオの歌い手が聖堂中央で歌い、附唱を詠隊が歌う。
5. シリアの聖エフレムの祝文。司祭が唱える。

聖体礼儀

1. 啓蒙者の礼儀（言葉の礼儀）

1. 始まりの祝福と大連禱
2. 聖詠からとられた第1アンティフォン（祭によって変わる）
できれば附唱をつけてアンティフォン形式で。続いて小連禱
3. 第2アンティフォン、第1アンティフォンと同様に歌うが、終わりには常に「爾の独生子」が続く。小連禱。
4. 第3アンティフォン、第1、第2アンティフォンと同様の歌い方で。
この間に教役者は福音経をかかげて小聖入を行う。（祭によって変る。）続いて聖入の句。
5. その日のトロパリとコンダク。複数の場合もある。両詠隊が交互に、指定された調で。
6. 聖三の歌。両詠隊が交互に歌う。教役者が歌うこともある。
7. 書札の読みのポロキメン。記された調でアンティフォン応答形式で歌う。
8. 書札の読み。
9. 聖詠の句とア ril l i y a。その日または祭日の調でアンティフォン応答形式で歌う。
10. 福音経の読み³¹
11. 重連禱
12. 啓蒙者の連禱

2. 信者の礼儀

13. 第1、第2の信者の連禱
14. ヘルビムの歌³²。荘厳に歌われる。両聖歌隊が聖堂中央に集まって歌われる。ヘルビムの歌の間に、聖職者のご聖体のためのパンと葡萄酒を捧げて「大聖入を行う」もある。この間に教役者は聖体機密のパンとぶどう酒を捧げて大聖入を行う。
15. 第1の増連禱
16. 信経。会衆または詠隊が歌う、または誦する。
17. 聖体機密のカノン（アナフォラ）(1) 司祭と詠隊のやりとり「平和の憐み…」

(2)

³¹ 一般的に聖体礼儀中の説教は福音の読みの後、または、神品領聖中に祈禱に立っていない司祭が行ったり、退出の前に簡単に行ったりしている。祭日の早課ではカノンの直前の福音の読み後に行う。私祈禱では始まる前。

³² ヘルビムの歌はИже Хервимы「我等、奥密にしてヘルビムを象り」が普通の聖体礼儀では歌われるが、聖大木曜日と聖大土曜日だけに異なる詞の歌が歌われる。しかしながら10世紀－12世紀には別の歌が歌われることが多かった。従って厳密に言えば、通常の歌詞のヘルビムの歌は暫定的に行われているにすぎない。

アンのトロパリを歌う。

9. 祭日早課の連禱

10. 終わりのやり取りに続き復活祭のトロパリを何度か歌い、発放。発放詞の終わりは特別の句「我等にも永遠の生命を給えり……」で終る。

復活祭早課の焦点はカノンにある。通常の早課にあるカノンに先づ部分は全部省かれる。このため音楽の高揚曲線は他のどの祈禱とも異なる形を見せる。徐々に緊張が高まるのではなく、一気に高いポイントから始まる。単に音楽的見地からみれば、カノンは少しも複雑でなく、常に繰り返される一、二種類のメロディのフレーズで構成される。この高揚は他の手段からも保持される。何度も炉義が繰り返され、全参禱者が灯したろうそくを持ち、左右の詠隊が次々と交互に歌う。カノンから続く高揚のカーブが休息するのはエクサポスティラリで、静かな美しい旋律は緩和の時をもたらす。しかしこのあと讃揚歌（「凡そ呼吸あるもの」）、復活スティヒラ、パスハのスティヒラへと高揚曲線が上昇する。この部分は祈禱の始まりの部分ほどの推進力はなく平静である。緩和のポイントがないままカノンから第2部分に直結していたら、2つめのハイポイントを感じるどころかある種の疲労感を生むだろう。

聖体礼儀

晩課や早課は日によって変わる部分が多く音楽的な形式もスタイルも実に多様であるが、聖体礼儀は変化する部分は比較的少ない。大部分が変化しない歌で、聖体礼儀の構造は不変である。変化する箇所は主に祈禱の最初の部分（啓蒙者の礼儀）に見られる。

聖体礼儀については多くの文献があるので、その構造は晩課や早課より概してよく知られている。ここでは音楽的な構造に着目して聖体礼儀の定式を考察する。

正教会には3つの聖体礼儀がある。(1)金ロイオアンの聖体礼儀、(2)聖大ワシリーの聖体礼儀³⁰、(3)先備聖体礼儀である。最初の2つの聖体礼儀は司祭の黙唱する祝文が異なり、聖大ワシリーの場合はかなり長い間、祝文を黙唱している時に歌われる歌も、ことばは金ロイオアンの場合と同じだが、より装飾的でメリスマ的なメロディをつけることで時間を伸ばし、祝文を読み終る時間をカバーしている。現在では金ロイオアンと聖大ワシリーの聖体礼儀の相違は信者の礼儀（信者の連禱から始まる）にあるのみで、他の部分は共通である。

聖体礼儀の基本構造は大祭も平日も全ての場合に共通である。祝祭の性質や度合いは音楽付けにのみ現れる。

³⁰ 聖大ワシリーの聖体礼儀は年に10回しか行われぬ。(1)降誕祭前晩、(2)神現祭前晩、(3)1月1日／14日の聖大ワシリー祭、(4-8)聖枝祭以外の大齋中の日曜日、(9)聖大木曜日、(10)聖大土曜日
訳注：降誕祭、神現祭が月曜日に当たった場合は、前晩に金ロイオアン、当日に聖大ワシリーの聖体礼儀が行われる。

9. 連祷と終わり、主日早課と同じ

最も顕著な特徴は讚美詞を挟んで行われる第17カフィズマの形である。音楽的高揚曲線は常に上昇し緊張を高める。陰鬱な5調で始まるが、第2段で幾分の喜ばしさが芽生え、第3段は祭的な3調で歌われ、更に輝かしさが増す。最初のハイポイントは復活トロパリの時に顕れ、2番目のハイポイントは、大詠頌、特に十字行で厳肅な聖三祝文が歌われるときにある。高揚したムードは聖書の読みから祈祷の終わりまで続く。

復活祭早課

復活祭の早課は、形式的にも音楽高揚曲線から見ても、全く特殊な形を持つ。普通の早課との類似は概観のみである。復活祭の早課は主日のスティヒラの一つ（6調の挿句のスティヒラ）を歌いながら聖堂を回る十字行²⁸で始まる。祈祷の実際の始まりは聖堂の外、閉じた門の前で始まる。

1. 始まりの祝福の後、教役者は復活祭のトロパリ「ハリストス死より復活し」を3回歌う。聖歌隊と会衆は繰り返す。司祭は第67聖詠の第4句（神は興き）を歌い、各句に応じて復活祭のトロパリを歌う。最後に司祭はトロパリの前半を歌い、聖歌隊は後半を歌う。司祭は手持ち十字架で聖堂の門を叩き、門は内側から開く。行進は聖堂内に進みトロパリを歌い続ける。

2. 大連祷

3. 復活祭のカノン、イルモスもトロパリも両詠隊が交互に歌い、各歌頌の最後のイルモス（カタワシャ）は両詠隊と一緒に歌う。各カタワシャのあと復活祭のトロパリが3回繰り返され、小連祷が続く。

4. カノン全部をこのように行う。各歌頌毎に小連祷がある（通常のように歌頌グループつまり1、3歌頌の後、4、5、6歌頌の後、7、8、9歌頌の後ではない）、「我が心は主を崇め」の代わりに第9歌頌の歌に短い讚美の附唱（ヒポフォン）をつけて歌う²⁹。第3歌頌の後イパコイ、第6歌頌の後コンダクとイコス、につづき復活の歌「ハリストスの復活を見て（主日早課12参照）」と復活のスティヒラ3回が歌われる。

5. エキサポスティラリ（3調）

6. 讚揚歌（第147、149、150聖詠）と1調の4つのスティヒラを両詠隊が交互にカノナルク形式で歌う。

7. 5つの祭的な「パスハのスティヒラ」両詠隊は聖堂中央に集まって歌う。最後は復活祭のトロパリを何度もくりかえす。

8. 「聖金ロイオアの復活祭の説教」を普通の話し方の口調で、荘厳に読む。読みがおわったら聖金ロイオ

²⁸ギリシア、ブルガリア、セルビア教会では、没薬を携えた女たちがハリストスの墓に参ったことを象って、復活祭早課の前に教会の門の前で福音書のその箇所が読まれる。

²⁹ 復活祭の祈祷の大きな特徴は、司祭の祝文や高声以外、誦経や聖詠誦読がない。すべて歌われる。

26. 挿句のスティヒラ6つ、カノナルフ形式で歌う。
27. 第12福音
28. 聖三祝文、天主經、誦する。
29. 特別のトロパリ4調を歌う。
30. 重連禱
31. 終わりのやりとりと発放（一時課は読まない）²⁷

上記のアウトラインから分かるように、通常の場合に加えて非常に多くの歌が歌われる。15のアンティフォン、6セダレン、三歌經の3歌頌、スティヒラ・グループ2つ、真福詞のスティヒラ等である。12の福音の読みの合間に多くの歌が様々な調と形式で歌われ、非常に厳粛な性格が付与され、参拝者の持つろうそくの光によってさらに高められる。祈禱の最後の大詠頌は歌わず、誦する。

次にあげるのは聖大土曜日の早課で、悲しみに満ちた厳粛なムードで始まるが、最後は喜びに満ちた祝祭の雰囲気以て終る。

聖大土曜日の早課

1. 始まりから「主は神なり」トロパリまでは平日早課と同じ。通常の形から変化するのはトロパリ以降。
2. トロパリに引続き聖詠經の第17カフィズマ、即ち第118聖詠を3段（スタチア）に分けて行方。聖詠の各句には讚美詞（μεγαλινάριον; похвала）とよばれる特別の歌が続き、葬られたハリストスを讚美する。聖詠の句は詠隊が歌うが、讚美詞は司祭が聖堂中央で唱える。第1第2スタチアはともに5調だが、メロディの構造が異なる。第3段は3調で歌われ、一挙に祭的なムードになる。第1、第2段の間に小連禱がある。第3段のあと5つの復活トロパリ（主日早課5参照）が歌われ、小連禱が続く。
3. 以下は大詠頌を歌う平日早課の形と本質的に共通であるが、カノンの第9歌頌の前の「我が心は主を崇め」*magnificat*は歌われない。
4. 大詠頌の終わりの聖三の歌が近づくと、就寝聖像（ἐπιτάφιον; плащаниця）を捧げて葬りの十字行が聖堂を出る。十字行の間、聖三の歌を長いゆっくりしたメロディで歌う。
5. 聖堂に戻り、聖大土曜日のトロパリを歌う。
6. ポロキメンとイエゼキリの預言書（エゼキエル）37章の読み
7. 第2のポロキメンと書札の読み
8. アリルイヤと句（聖体礼儀と同様）
福音經の読み

²⁷ 聖大金曜日には先備聖体礼儀も含めていかなる聖体礼儀も行わない。従って領聖もない。

トロパリも同様。小連禱

3. 第1福音

4. 第1アンティフォン8調

各スタンツァに先立つ句がある。2回歌う。(各詠隊1回ずつ)

第2アンティフォン6調

第3アンティフォン2調と小連禱

5. セダレン7調、司祭が炉義するあいだは会衆起立。

6. 第2福音

7. 第5、第6、第7アンティフォンと小連禱

8. セダレン7調

9. 第5福音

…………… 以下3つのアンティフォン、小連禱、セダレンの繰り返りで、第15アンティフォンまで歌う。

5番目のセダレン

10. 第6福音

11. 真福詞(マトフェイ5:1-12) 4調の特別のスティヒラ4句が山上の垂訓の詞のなかに挿入される。両詠隊が交互に歌う。小連禱

12. ポロキメン

13. 第7福音

14. 第50聖詠誦読

15. 第8福音

16. 聖大金曜日の三歌経のカノン 6調、第5歌頌から²⁶。

イルモスは2回繰り返す。各トロパリは二つ。6回

各歌頌の終わりにイルモスをカタワシャとして繰り返す。小連禱

17. コンダクとイコス、歌うこともある。

18. 三歌経のカノン第8歌頌、第9歌頌。「我が心は主を崇め」magnificatは歌わない。各歌頌に4トロパリ。

19. エクサポスティラリ 3回歌う

20. 第9福音

21. 讃揚歌(第148、149、150聖詠)3調。

祭日早課と同様に歌う。6スティヒラをはさむ。

22. 第10福音

23. 大詠頌、大詠頌を歌わない早課と同様に誦する。

24. 増連禱

25. 第11福音

²⁶ 三歌経のカノンは第5歌頌と第8、第9歌頌

をベースにし、そこに新しい歌¹⁹が挿入される。つまり、旧約聖書の歌頌の一句に続いて、対応するカノンの歌頌のイルモスが歌われる。更にその次の旧約歌頌の句に続いて、トロパリ、次の旧約歌頌の句、トロパリという順で歌われる。1つの歌頌には14、8、6、4句の旧約歌頌があり、それと対応して大量の新しいスタンツァが含まれる。旧約歌頌の句の数に足りないときは繰り返す²⁰。場合によっては複数のカノンが組み合わせられ、異なる調で歌われる（例、主日のカノンに一人または複数の聖人のカノンを合わせる）²¹。

早課の普通の形から三つの重要なバリエーションが見られる。聖大金曜日²²、聖大土曜日²³、復活祭の早課で、復活祭の早課は復活祭当夜と、若干の変化を加えて光明週間中の早課に行われる。この三つは順序も内容も前述した通常の早課と異なる。聖大金曜日、聖大土曜日の早課は特にドラマティックな性格を持ち、奉神礼的動作の象徴的な面を大きく強調する。聖歌もまた象徴的意味を反映する²⁴。

聖大金曜日、土曜日の早課はエルサレムで行われた受難祈禱を起源とする。もともと十二福音の読みに出てくるエルサレム市内の受難のあった場所で行われた。

聖大金曜日の早課の始まりは平日早課と同じだが全体のアウトラインは以下の通りである。（前述の平日早課と比較）

聖大金曜日早課（十二福音）

1. 通常の始まりと六段の聖詠、大連禱
2. 「主は神なり」のかわりに「ア rilイヤ」をリフレインとして特別のメロディ²⁵で両詠隊が交互に歌う。

¹⁹ 訳注：1章 聖歌の形式、3.カノンの項参照。カノンは8世紀ごろストディオス修道院で発達した。旧約歌頌の預言が、新約の時代にキリストによって成就されたことを表す。

²⁰ 現在は大斎の平日にのみ旧約歌頌を歌う。

²¹ 第1章参照

²² 聖大木曜日の晩に行われる。（夜の第1時、だいたい8時頃とティピコンのp. 449r. に指示される）ティピコンでは日没と夜明けから時を数える。

²³ 第7時、すなわち午前1時頃(Typikon, p. 454r)

²⁴ 概して正教会の儀式は象徴的な動作が豊富である。例えば司禱する主教は、その動作によって（俳優のようにハリストスの役を演じるのではなく、参禱者の思いをハリストスに向けることによって）ハリストスを象徴する。同様に聖体礼儀で教役者がパンとぶどう酒を持って行う大聖入も、ハリストスのエルサレム入城を演劇的に行うのではない。奉神礼的動作とその捧げものによって、信者の心の中で歴史的事実としてのエルサレム入城が象徴的に結合される。参禱者は、確かに、そこで行われる象徴的なことばを理解する。

²⁵ ア rilイヤをゆっくりメロディックに歌うと指示されている。《Поеиъ Аллилуия... коснои сг слав копением》(Typikon, p. 449r.)

たる者なり」。

23. 大詠頌と聖三の歌。アンティフォン形式または両聖歌隊が聖堂の中央に集まって歌う。

24. 定規のトロパリ。1、3、5、7調は復活トロパリ 祭日のトロパリ

パリ「今救いは世界に及べり」2、4、6、8調

の時は「主や墓より復活して」を歌う。

25. 重連禱

26. 増連禱

27. 司祭と聖歌隊の終わりのやりとり

28. 発放に続き一時課

平日早課では奉神礼音楽高揚曲線の高揚点はごく僅かである。大詠頌を歌わない早課では、4. 「主は神なり」とトロパリ、13. 「我が心は主を崇め」 magnificat、大詠頌を歌う早課では15. 讃揚歌とステイヒラ、16. 大詠頌、あとは4. 「主は神なり」と13. 「我が心は主を崇め」が比較的高いポイントになる。

対照的に祭日の早課には音楽の高揚曲線にずっと多くのピークがある。4. 「主は神なり」とトロパリ、6. ポリエレイから12. 祭日のステイヒラまで、19. 第9歌頌と附唱、21. 讃揚歌とステイヒラから23. 大詠頌と24. 祭のトロパリがハイポイントである。音楽的高揚の強さは祭の性質によって異なり、しばしば高揚曲線のハイポイントが再編成されるが、全体としての形は変わらない。音楽要素の密集の度合いの変化、その要素の歌われ方のコントラストを通して、聴き手の注目はさまざまな高さの緊張へと保持される。

音楽的見地から言っても、晩課早課は週の曜日による歌と年の周期からとられる歌が並立するので、特に多彩である。例えば、ある日曜日にその週の調の主日の歌に加えて、一年のうちでその日に記憶される聖人の歌を歌う。ステイヒラやカノンには両方からの歌が並び、様々な調のメロディで歌われる¹⁸。

早課のカノン実施の規則は特に複雑である。前章で述べたようにカノンの詩は旧約聖書の9つの歌頌

¹⁸ 代表的な例を挙げると、ある土曜日の晩課がマリア祭日の祭日後期で、ある聖人の記憶日にあたる時は、「主や汝に籲ぶ」では、その週の調の主日のステイヒラを4句、マリア祭日のステイヒラを3句、聖人のステイヒラ3句をそれぞれ異なる調で歌う。「光栄は」のあと、通常はマリア祭日のものを歌うが、できれば前のステイヒラと異なる調のものを選ぶ、続いて「今も何時も世世に、「アミン」」のあとその週の生神女ドグマティカ（生神女讃詞）を歌う。（Typikon, p. 139v: 11月25日の日曜日の組み合わせの方法）こうすると一つのステイヒラ・グループで5回も調が変わることになる。他のステイヒラ群の場合にもあてはまる。

7. 5つの復活のトロパリに「主や爾は崇め讃めらる」（第118聖詠12句）のリフレインを付けて復活のトロパリを歌う。

7. 讃歌を歌う。様々な聖詠の句からなるリフレインを付けて。祝祭的アンティフォン形式で歌う。生神女の祭日が日曜日に重なった場合は、讃歌の後5つの復活のトロパリを歌う。

8. 小連禱

続いて、その週の調のイパコイとポリエレイ後のセダレンを歌う。

続いて、祭のセダレンまたはイパコイを歌う。

9. その日の調3つのアンティフォン（品第詞ステペンナ）をアンティフォン形式で歌う。

9. 4調の第1アンティフォン「我が幼き時より」をアンティフォン形式で歌う。

10. その調の主日のプロキメン。アンティフォン応答形式で歌う。

10. 祭日のプロキメン。アンティフォン応答形式で歌う。

11. 11の復活福音の一つを読む。

11. 祭日の福音の読み。

12. 復活の歌「ハリストスの復活を見て」を歌う。12. 祭日のスティヒラを歌う。50を歌う。50聖詠第50聖詠誦読。二つの短い復活スティヒラを歌う。誦読、祭日のスティヒラを歌う。

13. 祝文「主や爾の民を救い」と「主憐めよ」12回

14. カノン第1、第3歌頌、小連禱。

15. その週の調の主日セダレンを歌う。

15. 祭日のセダレンを歌う。

16. カノン第4、第5、第6歌頌。小連禱。

17. その週の調の主日コンダクとイコスを歌う。

17. 祭日のコンダクとイコスを歌う。

18. カノン第7、第8歌頌

19. 生神女の歌「我心は主を崇め」（magnificat）をアンティフォン形式で歌う。

19. 主宰と生神女の大祭の場合はカノンの第9歌頌に特別の附唱を付けて歌う。他の祭日は「我が心は主を」を歌う。

20. カノン第9歌頌と小連禱

21. 先に行われた福音の読みに対応する11のエクサポスティラリ。

21. 祭日のエクサポスティラリ

22. 讃揚歌（第148、149、150聖詠）をその週の調で歌う。主日スティヒラ、その日の聖人のスティヒラをあわせて。カノナルフとアンティフォン形式で。最後から2番目のスティヒラは早課の11の福音スティヒラの一つ。最後は生神女讃詞「生神童貞女や爾は至りて讃美

22. 讃揚歌と祭日のスティヒラ。二つの聖歌隊とカノナルフ。祭日の最初のスティヒラの調で歌う

スティヒラが挿入されることもある。歌うまたは誦する。聖詠グループは「天より主を讃め揚げよ」から始まる。

16. 聖詠(またはスティヒラ)に続き誦経者は「光栄は爾光を顕わす主に帰す」に続いて大詠頌を誦する。終わりの聖三祝文なし。

17. 増連禱

18. 挿句のスティヒラをカノナルク形式で歌う。

19. 聖三、至聖、天主経を誦する。

20. その日のトロパリとそれに続く生神女讃詞を歌う。

21. 重連禱

常にスティヒラが挿入され、歌う。「凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ」から始まる。

16. 最後のスティヒラに続いて大詠頌を歌う。聖三の歌で終る。

その日のトロパリと終わりの生神女讃詞を歌う。

17. 重連禱

21. 増連禱

22. 司祭と詠隊(会衆)の終わりのやりとり。続いて発放。

早課に引続き一時課が行われ、コンダク「生神童貞女や慶べよ」で終る。

祭日早課

主 日

祭 日

1. 始まりは平日早課と同じ。

徹夜禱の一部として早課が行われる場合には、始まりの部分は省略され、晩課の発放のあと、直ちに六段の聖詠に移る。

2. 六段の聖詠(第3、37、62、87、102、142聖詠)誦読

3. 大連禱

4. 「主は神なり」の句。

その主日の復活トロパリ、聖人のトロパリ、
生神女讃詞

祭日のトロパリ

5. 聖詠経のカフィズマ二つ。誦する

各カフィズマのあと小連禱とセダレンを歌う。

6. ポリエレイ(第134、135聖詠)¹⁷にア Riluiya のリフレインを付けて歌う。または第118聖詠。

6. ポリエレイ。祝祭的なアンティフォン形式で歌う。

¹⁷年のすべての日曜日にポリエレイが指定されているわけではない。訳註：多油祭

平日の早課

大詠頌が歌われずに誦されるとき：

大詠頌が歌われるとき：

1. 始まりの祝福と祝文

第19聖詠、20聖詠誦読。十字架のトロパリとコンダク。

「主憐めよ」3回の短い連禱。早課の礼拝式が始まる。

2. 六段の聖詠шестпсалмие（第3、37、62、87、102、142聖詠）誦する。

3. 大連禱

4. 「主は神なり」の句。続いてその日のトロパリと対応する生神女讃詞を歌う。

5. 聖詠のカフィズマ二つまたは三つ誦読。（曜日や年の時期による）

各カフィズマの後その日のセダレン歌う。

各カフィズマのあと小連禱、その日のセダレン歌う。

6. 50聖詠、誦する。

7. 輔祭「主や爾の民を救い」「主憐めよ、」12回。

8. カノン第1歌頌と第3歌頌。イルモスは歌う。トロパリは誦する。

9. 小連禱、セダレン（その日に二つのことが記憶される場合は小さい方のコンダク）

10. カノン第4、第5、第6歌頌

11. 小連禱とその日のコンダクとイコス

12. カノン第7、第8歌頌

13. 生神女の歌「我心は主を崇め」（magnificat）¹⁵をアンティフォン形式で歌う。

第9歌頌の終わりに「常に福」（生神女マリアの歌）を両聖歌隊で歌う。

小連禱。

14. エクサポスティラリできれば歌う。通常誦される。

15. 讃揚歌¹⁶ 第148、149、150聖詠

15. 讃揚歌 第148、149、150聖詠

¹⁵ ロシア語ではчеснейшуюとも呼ばれる。「ヘルビムより尊く」честнейшую хервимъというリフレインが聖書の節ごとにつくため。

¹⁶ Praise 高揚歌と表示される場合もある。

14. その日または祭のトロパリ。

リティアが行われた場合は五餅と麦粒、油ワインを祝福。続いて33聖詠を歌う。

15. 重連禱（大晩課の8と同じ）

16. 祝福と発放

大晩課が徹夜禱の一部として行われる場合は祝福に引続き6段の聖詠（早課）が読まれる。

どの祈禱にも（晩課、早課、聖体礼儀）にも多数の歌が含まれる。音楽的高揚曲線（テンションカーブ）を見てみよう。その日の祝いの内容の厳粛さの度合いによって曲線の形は変化する。この曲線は歌い方の違い、祈禱の音楽的な構成（メロディのタイプ、多声的な音楽付けの度合いも含めて）、また教役者の動き、炉義、行進、その祈禱におけるシンボリズムの本質や程度など外的要因によっても左右される。

小晩課では、奉神礼音楽的高揚曲線は低い位置をとり、ハイポイントはわずかである。概要は以下の通り。

小晩課

1. 第103聖詠誦読。
2. 晩課の聖詠（通常の晩課や大晩課の5に同じ）4ステヒラを挿入。歌う。
3. 晩課の歌「聖にして福たる」誦する。
4. その日のポロキメン。
5. 祝文「主や我等を救い」誦する。
6. 挿句のステヒラ歌う。
7. シメオンの歌 歌または誦する。
8. 聖三、至聖、天主 誦する。
9. その日のトロパリ 歌う。
10. 短い重連禱 （連禱3つ）
11. 発放

早課

一日の奉神礼周期の中で、晩課に次いで歌う材料の豊富なのは早課である。主な早課の形3つを示し、続いて早課の特殊な形である聖大金曜日、聖大土曜日、復活祭の早課を示す。

3. 第1カフィズマの第1アンティフォン。ヒポフォンまたはアンティフォン形式。（土曜晩課は3つのアンティフォンすべてを 小連禱を間にはさんで行う。）

4. 小連禱

5. 晩課の聖詠 140、141、129、116聖詠、「主や爾に顛ぶ」八調経に記された調で、ヒポフォン、アンティフォン形式。

聖詠の最後の8または10句の間に、8または10個のスティヒラを挿入（場合による）。最後の4つのスティヒラは両詠隊が聖堂の中央に集まって歌う。最後の2つは祭的なスタイルで歌われることもある。最後のスティヒラを歌う時に、教役者は王門を通過して至聖所まで厳粛に聖入を行う。

3. カフィズマの一つを誦する。

聖詠の最後の6句の間に6スティヒラを挿入して行う。カノナルフ形式で。

6. 晩の歌「聖にして福たる」を両詠隊で祭的な華やかな歌い方で

6. 晩の歌「聖にして福たる」を簡素な歌い方で、または誦する。

7. その日のプロキメン。応答形式。

祭の前晩はプロキメンに引続き、旧約聖書が読まれる。（パレミヤ）

8. 重連禱

9. 祝文「主や我等を守り」誦する。

10. 増連禱

祭日にはここでリティヤが行われる。

○リティヤのスティヒラ。教役者らが啓蒙所まで行進する間に、両詠隊で、できればカノナルフ形式。

○輔祭が「主や爾の民を救い」を5分割して唱え、聖歌隊はその度に「主憐めよ」40回、30回、50回、2回、3回で 応える。

○教役者らが聖所にもどり、司祭が終わりの詞を唱える。

11. 挿句のスティヒラを聖詠の句にはさんで。両詠隊がカノナルフ形式またはアンティフォン形式で。

12. シメオンの歌「主宰や今爾の言に」通常歌う。

12. シメオンの歌「主宰や今爾の言に」誦する

13. 聖三、至聖、天主 誦する。

(3) 特別の場合にのみ行われる材料、週の曜日や、その週の調とは関係なく、特定の場合に常に行われる。(例：ポリエレイ) これらの歌は臨時に行われる通常の歌と分類できる。

(4) 適宜行われる歌：週の調、年の各週に応じて、調に従って、あるいはそれとは別に变化する材料。これらの歌は通常の歌で形成された枠組みに挿入される。通常の歌と適宜行われる歌を、額縁と絵にたとえる。額縁は変わらないが、そこに入れる絵は毎日入れ替える。

この他に課の固定枠の中で、詞は同じであるが週の曜日によって、また週の調によって異なる調のメロディで歌われるものがある。例えば晩課の聖詠「主や爾に顛ぶ」(141, 129, 116聖詠)、早課の讚揚歌「凡そ呼吸ある者」(148, 149, 150聖詠)である¹³。

以下、正教会の主な祈祷の定型の形を述べ、ついで特殊な変化形についても解説する。

晩 課

晩課には3種類ある。

- (1) 大晩課：徹夜禱が行われる土曜の晩、大祭の前晩に行なわれる。
- (2) 平日晩課
- (3) 小晩課

比較のために大晩課、平日晩課の概要を並列し、小晩課は別記する。

大晩課 平日晩課

大晩課	平日晩課
1. 第103聖詠を歌う。できればヒポフォン形式で	1. 第103聖詠を誦読。
2. 大連禱 ¹⁴ 応答形式	
輔祭のエクフォネシスと会衆または聖歌隊の応答の組合せ。司祭の高声「光栄は」で終わる。	

¹³ 挿入される最初のスティヒラの調で聖詠の句を歌う

¹⁴ 連禱litanyまたはektenia(συναπταί; ектении またはτὰ διακονικά ;диакнства) は輔祭 (なければ司祭) の唱える一連の祈願からなる。各祈願に会衆または会衆を代表する聖歌隊が「主憐れめよ」Κύριε ἐλεῖσον; Господи помилуй、「主賜えよ」Παράσχου Κύριε; подай Господиなどと応える。正教会では(1)大連禱 великая ектения (安和の連禱 το εἰρηκόν') 1 2個の祈願と「主憐れめよ」という応答、(2)小連禱 малая ектения、2つの祈願と同上の応答、(3)重連禱 (熱切な祈願) сугубая ектения、場合によって祈願の数は異なる、応答は「主憐れめよ」3回ずつ。(4)増連禱 просительная ектения、初めのいくつかの祈願には「主憐れめよ」と応え、途中から「主賜えよ」と応える。音楽的には、重連禱を除き(高揚した雰囲気がある)、連禱は祈祷の中で休息点をなし、様々な聖歌をつなぐ役割を果たす。

り夜を徹して行う⁹。大聖堂や教区教会では土曜日や大祭の前晩に大きく省略された形で行われる¹⁰。

徹夜祷には通常リティヤ（Литія; Лития）が含まれ、晩課の後半に挿入される。リティヤは聖堂の回りをまわって啓蒙所に入る行進の形をとることもあり、啓蒙所あるいは教会の入り口近くで行われることもある。

祭日や、大齋、受難週、光明週間、あるいは降誕祭や神現祭の前晩といった特別の期間には平日の祈祷の形が変わる。例えば大齋期間中は、平日の聖体礼儀つまり先備聖体礼儀は晩課に直結し、はっきりした切れ目がないままに聖体礼儀に流れ込む。特別の課の詳細については後述する。

ここに述べた課すべてに歌う材料が豊富なわけではない。たとえば時課では大半が誦読で、晩堂課や夜半課では歌う部分のごく僅かである。逆に晩課（含リティヤ）や早課、特に徹夜祷として行われる晩課早課には歌う材料が豊富で、比類なく多彩で変化に富んだスタイルの聖歌を聞くことができる。大部分が聖歌で占められ、内容は神への奉獻であり同時にその日や祭の主題を発展させてゆく。歌は様々な調や音楽スタイルで歌われ、音楽的多様性をもたらす。

各日に歌う聖歌の素材、誦する素材は(1)年の周期と、(2)週の周期に従って変化する。また特別の期間においては三歌齋経の周期（大齋と受難週、大齋前の4主日を司る）、五旬経の周期（復活祭の主日から五旬祭後第1の主日まで）に従う。年の周期に従って、何月何日に歌われる聖歌が定められる。そこには固定祭日や聖人の記憶に関連した歌が含まれる¹¹。それぞれの周期に従う歌は祈祷書に指示された様々な調（エコス）で歌われる。例えば聖ニコライ祭（12月6日）では、聖歌は7調を以外の様々な調で歌われ、他の祭日や聖人の記憶日にもそれぞれ調のパターンが記載される¹²。

週の周期（八調・オクトエコスの周期）には、各調の土曜日の晩課だけでなく1週間の各曜日に歌われる歌が含まれ、八週周期の「調の表柱（гласовой）」を構成する。各課において、週の周期に属する歌と年の周期に属する歌が特別のルールに従って組み合わせられる。そのため各課の音楽形式は様々な調（エコス）のメロディが色とりどりの隊列を組んだように絶え間なく変化する。

西方教会の課の場合と同様に正教会の各課の聖歌材料は以下の4つに分類できる。

（1）通常の歌：その課に定まった枠組みを作る変化しない材料。この材料は祭日、調、週によって左右されないが、歌い方のスタイルや方法は場合に応じて変わる。祝祭的に歌う、普通の歌、誦する、など。

（2）特定の課、特定の曜日において常に行われる材料、その週の調には支配されず、他の要因とは関係なく曜日によって変化する。（例：晩課のポロキメンは曜日で変わる）

⁹ 修道院では徹夜祷を行う土曜日と祭日には、夕方の祈祷の順序が変わって、九時課の後小晩課が行われ、夕食後、晩堂課が行われる。

¹⁰ ギリシアでは早朝の早課に直接引き続いて、大詠頌に続いて聖体礼儀が行われる。

¹¹ 年の周期は月課経（ミネヤ）の周期Минейный кругともいう。

¹² 聖ペトル・パウエル祭（6月29日／7月12日）にも、7調以外のすべての調を用いて歌われるが、聖ニコライ祭とは異なる組み合わせによる。

の形の面影を残している。

今日修道院や大聖堂、教区教会などで見られる奉神礼の秩序は15世紀中に確立されたのは間違いない⁵。それ以前ロシア教会は正教を受容したときからコンスタンティノーブルの秩序を用い、大聖堂教会ではコンスタンティノーブルの聖ソフィア大聖堂の秩序(Τῆς μεγάλης ἐκκλησίας)を用い、修道院ではコンスタンティノーブルのストゥディオス修道院の秩序に従った。コンスタンティノーブルの秩序はエルサレム・ティピコン(Hagiopolitical-Hagiooritical)とは聖歌の要素において相当数の違いがある。今日では聖大土曜日の早課など特別の課にわずかな痕跡が見られる。

祈祷の一日の周期

正教会の奉神礼上の一日は、日暮れ時の晩課に始まる。従って土曜日の夕方の晩課は日曜日に属し、祝祭的性格を持つ。一日は翌日の晩課直前の9時課で終わる。

奉神礼の一日には次の課officeがある。

1. 晩課 Vespers; Ἑσπερινός; Вечерня
2. 晩堂課 Compline; Ἀπόδειπνον; Повечерие, Повечерица
3. 夜半課 Nocturn, Midnight office; Μεσονυκτικόν; Полунощница
4. 早課 Matins; Ὁρθρος; Утренняя⁶
5. 一時課 1st hour; Α΄ ὥρα; Первый час
6. 三時課 3rd hour; Γ΄ ὥρα; Третий час
7. 六時課 6th hour Σ΄ ὥρα; Шестой час
8. 聖体礼儀 Divine Liturgy; ἡ θεία κλειτούργια; Божественная литургия, обедня
9. 九時課 9th hour; η΄ ὥρα; Девятый час

晩堂課、夜半課、九時課⁷は修道院では行われるが、大聖堂や教区教会では省略されることが多い。

修道院ではこれらの9つの祈祷を3つのグループにまとめて行うことが多い。(1) 9時課、晩課、晩堂課(夕方行う)、(2)夜半課、早課、一時課(夜中、または夜明け前に行う)、(3) 3時課、6時課、聖体礼儀(正午前に行う)⁸。大祭の前晩には(ロシアの実践では毎土曜日も)、晩課、早課、一時課をまとめて、徹夜禱(All-Night Vigil; ἀγρυπνία; всенощное бдениеまたは単にвсенощное)として文字どお

⁵ 府主教キプリアン(1381-1385, 1390-1406)と府主教フォティ(1410-1431)の時。

⁶ Заутреняとも言う。西方教会のMatins、Laudsに対応する。

⁷ 大斎と、降誕祭、神現祭の前晩を除く。

⁸ 大聖堂教会や教区教会では、夕方に晩課、早朝に早課と一時課、午前中に三時課、六時課、聖体礼儀、の順で行われることが多い。

第2章 正教会の奉神礼のシステム

第1章で述べたように、正教会の聖歌の形式は礼拝の秩序（オールド、式順）と密接に結びついている。礼拝の秩序は、彩り豊かな聖歌という「絵」を枠取る構図であり、そこから正しい機能が引き出される。今一度礼拝の秩序を眺め、最小限、主たる特徴については詳しく考察する。

礼拝秩序の発展の全体史や、西方教会及び非正教会の東方教会（アルメニヤ教会コプト教会）の礼拝の形を類例と考察するのは、奉神礼学、奉神礼考古学の領域に属し¹この論文の域を越える。ここでは奉神礼の構造面を簡単に検討するにとどめる。聖歌が大きなウエイトを占める祈祷については構造を正確に考察するが、聖詠誦読や誦経が大部分の課については簡単に触れるにとどめる。

今日ロシア正教会のすべての祈祷を統御する基本となる礼拝秩序は²、いわゆるエルサレム・ティピコン（Hagiopolitical-Hagiooritical order）で、聖都エルサレムと聖山アトスで用いられる³。ロシアの修道院、大聖堂教会、教区教会で用いられるが、ティピコンの指示は修道院の教会を対象としており、実際には大修道院でしか実践できない最大量が含まれる。修道院では当たり前に行えることも、普通の日常生活を送る都市住民には不可能である。仕事を持ち、家庭生活を営む信徒に、日に十時間もの参拝は望めない。大聖堂、教区教会では極端に長い祈祷は当然のことながら短縮される。ティピコンそのものには省略のための手引きは書かれていないので、実際には次のような方法で短縮が行われる。(1) 祈祷のある部分、特に聖詠誦読、誦経の部分を省略する(2) 歌全体を省く。まず何度か繰り返すべきところを1度にする⁴。(3) 短い簡単な曲付けにする。(4) ティピコンに歌うように指示されている歌を誦する。(5) ある時課を全部省略する。しかしながらこのような省略は、奉神礼の見地からみて常に正しく行われているとは限らない。

ティピコンは奉神礼を執行する際の最大規模の標準を示すが、最大最古の修道院や二、三の古い大聖堂では時折幾分の逸脱が見られる。これらの逸脱は、聖歌そのものや歌い方に関わり、より古い奉神礼

¹ 参考：A.Baumstark, *Liturgie comparée*, 3rd ed. (Chevetogne, Belgium:1953) & bibliography (pp.223-259); 現在のロシア正教会の秩序についてはK.Nikol'skii, *Пособие к изучению устава Богослужения Православной Церкви* 「正教会のティピコンの学習のための参考」第6版(St.Petersburg : n.p. 1900, 再版 Graz : Akademische Druck und Verlagsanstalt, n.d.); S.V.Bulgakov, *Настольная книга для священно церковно служителей* 「神品机上本（聖職者のための参考書）」第2版；(Kharkov:n.p.1900; 再版Granz:n.p.1965); L.Mirković, *Православна Литургија или наука о богослуженю православне источне цркве* 「正教会の奉神礼または正教会の奉神礼の研究」vol.1(n.p.1919; 再版,Belgrade:n.p.1965)

² *Типикон, сиестъ уставъ*, (Moscow: Синодальная типография, 1906; 再版 Moscow: n.p.1954)

³ 今日ギリシア正教会コンスタンティノーブル総主教区、ブルガリア正教会は別のティピコンを用いており、細部にHagiopolitical-Hagiooritical orderとは相違が多く見られる。

⁴ ある祭日のスティヒラは、ティピコンでは2回または3回繰り返すように指示されている。